



かかせじぞう

昔々ある所に、貧しいおじいさんと
おばあさんが住んでいました。大みそ
か、明日はお正月だというのに、食べ
物を買うお金がありません。

おじいさんは、手作りのすげ笠を売
りに、町に出掛けました。

「笠はいらんかねえ、

笠はいらんかねえ。」

けれども、町の人たちは皆忙しそう
で、誰一人、見向きもしません。

雪が降り始めたので、おじいさんは
笠を売るのが諦めて、家に帰ることに
しました。

帰り道、おじいさんは六体のお地藏
様を見つけました。真っ白に雪をかぶっ
て寒そうです。

「おやおや、お地藏様。

お寒いことでしょう。」

おじいさんは、お地藏様の雪を払っ
て、売り物の笠を一つ一つかぶせてあげ
ました。ところが、最後のお地藏様の
分が一つ足りません。

そこで、おじいさんは、

「お地藏様、わしのほっかむりをかぶっ
てくださいな。」

そう言って、自分の頭に巻いていた
手拭いを、かぶせてあげました。

家に帰ったおじいさんは、おばあさ
んに今日の出来事を話しました。

おばあさんは、
「それはよいことをしましたねえ。」
その夜、おじいさんとおばあさんは、
幸せな気持ちで、静かに眠りにつきま
した。

真夜中、二人は、ズシン、ズシンとい
う大きな音で目が覚めました。その音
は、おじいさんとおばあさんの家まで
近づいて来ます。不思議な声もします。

「じいさまの家はどこじゃ、
どこじゃ。」

そして、ドスン、ドスンと、物を置く
音が聞こえました。

おじいさんとおばあさんが、恐る恐
る戸を開けると…

なんと、たくさんのごちそうがどっ
さり積んであるではないですか。

そして、笠をかぶったお地藏様たち
が、帰って行く後ろ姿が見えました。

一番後ろのお地藏様は、おじいさん
の手拭いをかぶっています。

おじいさんとおばあさんは、
「なんて、ありがたい。」

こうして、おじいさんとおばあさん
は、お地藏様からの贈り物のおかげで、
無事にお正月を迎えることができまし
た。

(おしまい)